平成１９年６月２５日提出

会派会長：　永　田　　寛 ㊞

政務調査研究視察　報告書

報告者：梅　村　順　一

視　察　日	**平成１９年４月11日（水）・12日（木）・13日（金）**
視　察　先	**新潟県長岡市と村上市、新発田市**
視 察 内 容	**「特色ある学校教育」、「町屋の再生」と「新発田市のまちづくり」他**
視　察　者	**近藤隆志、加納吉久、高野克一、清水　勇、安形光征、杉浦立美、深瀬　稔、梅村順一　　計８名**

新潟県長岡市

＜新潟県長岡市の特色ある学校教育＞

1　長岡市の概要

人口：28万人　世帯数：9万世帯　面積：840㎢、

歳出：1,287億、財政力指数：0.77

新潟県中央部、新潟平野の南端に位置する。長岡藩の城下町として栄え、平成18年1月1日に、栃尾市、与板町、和島村、寺泊町と合併し、新「長岡市」となる。

2　視察項目の概要

合併により極小規模校を持つ本市では、特色ある学校教育を実施している。岡崎市においても小学校統合が課題となる中で、過疎教育実践校である本市の抱える課題を研究した。

(1)学区外就学許可

平成16年度より許可区域の設定基準を明確化。保護者の要望とともに、行財政改善推進委員会からも、通学区域制度の弾力的運用が提案されたことによる措置。ここに至るには、近隣の学校への通学希望だけでなく、特例校である太田小・中学校への特色ある教育を選択させることや、スポーツ就学として、指定学校区内に希望する部活動がない場合、隣接中学校への就学を認めてきた経緯がある。

(2)学校の統廃合について

旧栃尾市の学校統廃合の状況は、合併前に14校であった小学校は、9年後7校となり、1612人いた児童は、現在1055人となっている。

(3)太田小・中学校の特色ある教育について

太田小・中学校は、児童生徒数23名の小中併設校である。教育活動では、マンツーマンに近い少人数授業ができ、小中併設を生かした教員の連携や授業・行事への取り組みが行われている。また、パソコンや英語検定や漢字検定の奨励を進めている。特に英語教育に重点をおいている。太田の自然を活かした指導や異学年交流・人間関係づくりに配慮している。

長岡市

〔感想・岡崎市への反映〕学校の統廃合が進む中で、通学区域の弾力的な運用をはじめたことに意義がある。太田小・中学校の小中併設教育は、先進的な事例だ。課題として、教職員側の戸惑いや不安があり、交通手段においても課題が浮かんでいるという。スクールバスに限らず、福祉バスやコミュニティーバスによる通学を実施している。新岡崎の直面する小学校統合において、各方面からの提案が期待される。

旧山古志村

＜旧山古志村の震災復旧状況＞

1　長岡市山古志地域の概要

新潟県のほぼ中央に位置し、山間丘陵地で全域が傾斜地である。人口 2,168 人、世帯数 681 戸、14 の集落。棚田、錦鯉、闘牛など地域資源に恵まれ、多くの観光客が訪れる。

2　中越地震の概要

平成１６年１０月２３日、M　6.8 の中越地震が発生。ゆれによる被害ではなく、地盤がゆるく地すべりによる災害となった。長岡市でもM６を観測し、死者 12 名、重軽傷者 2,100 名。全壊 1,487 棟、半壊 1,024 棟、一部損壊 5,875 棟となった。仮設住宅は 320 世帯 950 名が避難生活を送った。平成１７年、長岡市は、全国から 50 名の技術派遣を受けた。旧山古志村においては、残る６集落の帰村に向けた努力をしている。

3　被害状況

＜人的被害＞死者２名、重傷１名、軽傷 25 名、全村民 2,168 人が避難。**＜斜面崩壊等＞**斜面崩壊 300 箇所，300ｈａ。水没域 34ｈａ。**＜インフラ被害＞**道路の被害はひどく、村域中央部では 90%近くが損壊。上水道である簡易水道は、全壊。共同アンテナ全壊。**＜産業被害＞**錦鯉 176,000 匹が死亡。成畜 88 頭が死亡。**＜住宅被害＞**住宅の４割が全壊。

4　やまこし復興の基本目標

＜安全・安心なむら＞①安心して暮らせる土地　②アクセス道路の確保　③ライフラインの復旧　④情報基盤の整備　**＜米づくり・錦鯉・勤労＞**①棚田での米作り　②棚田での錦鯉生産　③野菜等の生産基盤再生　④日銭を稼ぐ就労の場　**＜中産間地域モデルであった山古志の復旧＞**①棚田を守る集落自治組織　②闘牛の復活　③錦鯉の復活　④手掘り隧道の歴史

土砂に埋没した新築家屋：雪の為基礎部分が高く通常の 1.5 回まで埋没

5　山古志集落再生計画の概要

＜地域社会活動の再生と新たな盛業の展開＞①コミュニティ活動の活性化　②農業プラス観光の新たな産業づくり　③野菜直販やグリーンツーリズム　**＜冬の暮らしの住環境の解決＞**①安全安心な住宅の確保　②急勾配な道路の改善　③公的賃貸住宅の建設　**＜山古志の魅力再生と創造＞**①日本を代表する集落景観の再生　②若者や定年組みの帰村への条件づくり　③伝統民家の再生活用　④不在地主の土地や空き地の有効活用

旧山古志村

〔感想･岡崎市への反映〕

私たちは、山古志地域に入った途端に言葉を失った。合併した長岡市山古志地域は、昔の面影はない。震災から２年半経過した今も帰村できない集落がある。傷跡が痛々しく、地肌が現れ押しつぶしたような惨状だ。河川閉塞の現場では、見上げる山が崩れ川をせき止めたという。水没家屋も見た。雪のため２階住宅は３階建のように見えるそうだが、２階部分しか見えていない。国の直轄施行や災害関連緊急事業により、復旧が急がれているがまだ先は遠いようだ。

旧山古志村の職員が復旧担当となり、山古志復興に汗を流している。基本目標を掲げ、ふるさと山古志で再び暮らしたいと願っている。ほぼ全壊した集落機能の再生のために、山古志集落再生計画が立てられた。過疎化が進む中山間地域の集落が、自立的かつ継続的に再生するため、創造的に復旧する集落再生計画を作成したことは、岡崎市にとってもおおいに参考になると感じた。

新潟県村上市 四月十二日午後研修	**＜町屋の外観再生プロジェクト＞** **プロジェクトで整備された和菓子屋** **1　村上市の概要** 人口：３万人、世帯数：１万世帯、面　積：１４２㎢、歳出：102 億、財政力：0.50。新潟県の北部、日本海に面した城下町。武家屋敷や文化財が多く現存。秋には鮭が三面川を遡上する。活力に満ちた観光文化都市を目指す。 **2　施策項目の概要** **(1) プロジェクトの概要** 　市民自らの力で活性化しようと、市民基金を創設して城下町村上市の「町屋の外観の整備再生」を目指す。年間１千万円、１０年間で１億円の資金を募り、城下町として個性にあふれ、お祭りの似合う市民が誇る歴史の街を蘇らせる構想。 **(2)行政のかかわりについて** 　町屋とは、旧町人の家屋で間口が狭く奥行きが長い伝統的な建造物である。家屋の奥に入ると囲炉裏や梁、大黒柱に神棚、仏間があり、豪快な吹き抜けの造りがダイナミックな印象を与える。こうした中、吉川真嗣の努力により村上町屋商人会が結成され、生活空間である「町屋」の内部を公開する取組みが始まる。「町屋の人形さま巡り」（３月）と「町屋の屏風まつり」（９月）を開催し、約１０万人を超える観光客を集めた。　次に、歴史ある町並み再生を目指し、コンクリートブロックを黒塀で覆う活動「黒塀一枚千円運動」を起こし、１５０ｍの黒塀が完成。これらの活動は、行政に頼らぬ村上市民の活動であり、その成果は、総務省や国土交通省、内閣府にまで認められた。 **(3)まちづくりへの課題と新たな活動** 　しかし観光客は、３月と９月に集中し、年間を通じた活性化にはもう一歩の努力が必要となった。そして**「町屋の外観再生プロジェクト」**が始まった。町屋の中に入れば江戸や明治時代そのままに姿を残しているが、道路に面した外観は、アーケードやサッシ、トタンなどで覆われていた。どこにでもある町の外観を昔ながらの格子や壁、硝子戸に変え、景観を整えることで、町屋の内側からと外側からも充実した魅力となり、その価値が格段に高まると考えたのである。 **黒塀一枚千円運動の整備** **(4)今後の展開** 　この活動により村上は、年間を通じた活性化を図ることができた。外観だけの改修で経費を抑えながらも、町並みの趣は大きく変わることになる。財政難であった行政に頼らず、民間の発想で市民自らがまちづくりの活動を支えることとなった。村上市役所では、市民活動を応援し、**「のんびりと　鮭といで湯の城下町」**をテーマに総合的なまちづくりを目指している。
村上市	**〔感想・岡崎市への反映〕** 　市役所に隣接する小学校のフェンスは木製の塀になっていた。これは行政が、町屋の外観再生の一環として協賛することを象徴するものとなった。村上名産の塩引き鮭は、有名だ。平安の昔、村上を流れる三面川の鮭は都に献上され、江戸時代には村上藩士が、鮭の回帰性を発見して「種川の制」を考案して財源を潤した。後世の人たちが、城下町村上の再生を図ろうと努力する理由は、長い歴史と文化に育まれてきた地域の重いが結集した成果であろう。おなじ城下町として、岡崎市のまちづくりにひとつの方向性が示されたように感じる。

新潟県新発田市四月十三日午前研修

＜新発田市のまちづくり＞

新発田市のまちづくり説明

1 新発田市の概要

人　口：１０万人、世帯数：３万世帯、面　積：532㎢、歳出：418億、財政力：0.57、新潟市の北東約３０ｋｍに位置。新発田藩１０万石の城下町。県内有数の穀倉地帯。０３年７月豊浦町、０５年５月に加治川村・紫雲寺村を編入した。

2 視察項目の概要

(1)都市マスタープランの該当面積

都市計画区域の面積は、106㎢で20%。そのうち市街化区域は、15㎢で調整区域は、91㎢。都市計画区域外は、426㎢(80%)。都市計画区域内人口は、82,041人で77%にあたる。

(2)合併による基本構想改定の着眼点

平成15年と平成17年の合併による新たな地域資源の活用と新生　新発田市のまちづくりを推進するために基本構想を改定する。その着眼点は、①新たな自然資源や温泉資源を活用し、産業振興の中に「観光の振興」を追加する。②合併した４市町村の位置づけや、まちづくりの特色を表現するために「地域別構想」を追加する。③合併により市域が広がったことを受け「土地利用計画」を改訂する。④資料や案内パンフレットを変更する。

(3)都市マスタープランの改正の必要性

①新発田市のまちづくり基本構想の改訂。②市町村合併による市域の拡大。③社会経済の変化と事業の進捗。これらの理由により、旧新発田市都市マスを基本に、合併前の旧町の計画を編纂する。また都市マスタープランを補完する関連計画として、農村マスタープランや中心市街地活性化基本計画、景観計画、まちづくり交通計画がある。

新発田市役所前にて

(4)農村マスタープランと食糧供給都市構築戦略の概要

本市が提案する農村マスタープランとは、農村整備という観点から、農村地域における生産、自然、生活などの要素を検討し、あるべき農村の将来像とそれを実現するための施策や地区別の構想を示した計画書である。「都市マスタープラン」と相互に補完しあって、総合的なまちづくりの実現を図るものである。また食糧供給都市構築戦略とは、「農」と「食」の融合を図る施策を示し、本市の将来都市像を食糧供給都市と定め、単なる食料の生産供給を行う都市でなく、人と自然が互いに共生し、高度な都市機能を併せ描いた都市を示すものである。

新発田市

〔感想・岡崎市への反映〕

これまでのまちづくり総合計画策定には、都市部から見た都市マスタープランに重きが置かれた。新発田市長は、市域の８割を占める農村部から見た「農村マスタープラン」の必要性を感じたという。「共創」の理念を掲げた。これは、仲間として一緒に始めること。市民と行政との協力によって、共に創り上げるという造語だ。他に、自立（自己決定と自己責任）、共生（自然環境との対話と都市と農村の融合）、協働（市民と行政のパートナーシップと参加から市民主体への転換）、個性（意識改革と人材育成）、経営（市民からの信頼ある満足経営と真心行政の構築）を理念にしている。合併による計画改訂が進む中、地域別の役割分担を明確にしている。都市マスと農村マスは、市民が理解しやすいバランスの取れた計画として、岡崎市にも導入されることがおおいに期待される。